

「私達、そしてユダヤ人の救い」

私達は礼拝においてローマ書を見ております。このローマ書は9章から11章までユダヤ人に向けて書かれているとお話ししてきました。そして、今日の箇所もユダヤ人に向けて書かれているのです。しかし、この箇所はユダヤ人のみならず、私達にも語りかけています。今日はまずローマ10章14節―21節を読み、そのところから「私達、そしてユダヤ人の救い」ということについてみてまいりましょう。

14 しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあろうか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。15 つかわされなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。「ああ、美しいかな、良きおとずれを告げる者の足は」と書いてあるとおりである。16 しかし、すべての人が福音に聞き従ったのではない。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っている。17 したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。18 しかしわたしは言う、彼らには聞えなかったのであろうか。否、むしろ「その声は全地にひびきわたり、その言葉は世界のはてにまで及んだ」。19 なお、わたしは言う、イスラエルは知らなかったのであろうか。まずモーセは言っている、「わたしはあなたがたに、国民でない者に対してねたみを起させ、無知な国民に対して、怒りをいだかせるであろう」。20 イザヤも大胆に言っている、「わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した」。21 そして、イスラエルについては、「わたしは服従せずに反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた」と言っている（ローマ10章14節―21節）

最初にまずこのところから「私達の救い」ということについてお話しします。かつてイエス・キリストは、やがて世の終わりが来るということを語りました。そして、その時が来る前に起こる様々なことについて言及しているのですが、その中の一つが「福音はまず全ての民に宣べ伝えられなければならない」（マルコ13章10節）ということでした。

今から2000年前、クリスチャニティーは産声を上げました。そして、その言葉のとおり、今日、全世界に福音は宣べ伝えられています。これを世界各国に伝えるべく、異国に渡り、その場所でそこに住む者達と共に生き、主の言葉を見せ、主の言葉を語る者達を私達は宣教師と呼んでいます。

2018年2月11日「私達、そしてユダヤ人の救い」

彼らは住みなれた自分の国を離れて、世界各国に福音、グッドニュースを携えて出て行くのです。

中には未開の地のような場所に行く宣教師もいます。そのような場所には首狩りの習慣、魔術をする者達、人間を儀式の犠牲にする習慣がある地域もありました。彼らはこれらの人達の中に入っていて、まさしく命がけで福音を伝えました。いいえ、実際にこの使命のために命を失った宣教師が多くいます。

私達の母国、日本にもたくさんの宣教師がやってきましたし、今も世界各地から宣教師が遣わされています。日本の多くの教会はこれらの宣教師によって作られたのです。皆さんの故郷にあるミッションスクールや病院の多くも元々はこのような宣教師達によって始められたのです。

戦後、日本の北陸伝道に赴いたアメリカ人宣教師は、自らが日本で過ごした半世紀の日々をこう語っています。「日本人がご飯の上に生卵をかけて、納豆を食べていることに驚きました。私の国では卵はスクランブルエッグで食べるもので、腐った豆を食べる習慣ありません。最初はこれらの日本の食事に驚き、勇気をもって口には入れたもの、慣れなくて身体を壊しました・・・。でも、今、私は卵かけご飯も納豆も大好きです」。

私達はこのような話を微笑みながら聞きますが、目の前でごはんの上に生卵がかけられるのを見、納豆の匂いを嗅ぎ、あの糸を引くねばりけを見た時の驚きはいかほどだったのでしょうか。そして、これらのものが大好きになるほどに日本を愛し、日本に溶け込んでいった宣教師達の苦労はどんなものであったかと想像します。彼らは福音を伝えるために日本語を必死で習得し、時に己れの慣習や文化を封印し、日本の慣習や文化に溶け込んでいったのです。

なぜ、彼らは本国の豊かな生活を捨ててまで、電気も水もないような未開の地に行くのでしょうか。文化も違い、言葉も違い、不自由を覚悟して、もしかしたら自分の健康や命すらも失いかねない地になぜ彼らは向かうのでしょうか。彼らは一攫千金を求めて宣教地に行くのではなく、人間的に見たら報われないことだらけであることを知りながら、そこに出て行くのです。なぜなら、彼らは自分が伝えることにはそれだけの価値があるからと確信しているからです。

彼らは極めて単純な理由から本国を離れて宣教地に出て行きます。すなわち彼らの多くは今日、読みました聖書の言葉に背中を押されて出ていくのです。「しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがある

うか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあるうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあるうか。つかわれなくては、どうして宣べ伝えることがあるうか」（ローマ10章14節-15節）。

このことゆえに、今日も世界のどこかの空港から宣教師が外国に飛び立ちます。なぜ？聞いたことのないものを、信じることなどできないからです。宣べ伝える者がいなくては、聞くことはないからです。つかわれなくては、宣べ伝えることなどできないからです。彼らはこの言葉を受け止めて旅立つのです。

それではこの宣教師達が伝えようとした価値あるものは何なのでしょう。このことは、はっきりしておかなければなりません。16節にはこう書かれています。『イザヤは「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っている』（ローマ10章16）。この宣教師達が苦労して外国で伝えようとしたことは、たとえ語られても、とても信じる事ができないようなことでした。それは何でしょうか。ここに記されていますように、それは旧約聖書のイザヤ書53章1節からの引用なのであります。

そのイザヤ53章の1節以降に何が書かれているかといいますと、そこにはキリストが十字架にかかる時の様子が記され、そして、彼が十字架にかかる理由について書かれているのです。もう何度もお話していますが、このイザヤの預言はそのイエス・キリストが十字架にかかる750年も前に書かれているのです。そして、イザヤはそのキリストの十字架預言を語る前に一つの前置きとして言っているのです「誰が、我々の聞いたことを信じ得たか」。

イザヤはここで「これから私が書き記そうとしていることを、いったい誰が信じようか」と言っているのです。そうです、イエス・キリストというお方が私達の罪の身代わりとなられて十字架におかかりになった。誰がそんなことを信じられるかというのです。パウロもそのことをしっかりと踏まえてイエス・キリストの十字架について語り、宣教師達も「誰が自分が語るこのイエス・キリストの十字架を信じ得ようか」というメッセージをたずさえて出ていくのです。

人は本来、神の前に罪人であり、その罪ゆえに神の前に裁かれると聖書は語ります。しかし、その罪はキリストにあって赦されるというのです。イザヤははっきりとそのことを預言しています「しかし彼は（イエスは）われわれのとが（罪）のために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼は（イエスは）みずから懲らしめを受けて、われわれに平安を

与え、その打たれた傷によって、われわれは癒されたのだ」（イザヤ53章5節）。

壁に書かれた落書きなら特殊な洗剤を使って、汗を流しながら、ゴシゴシ洗えばきれいにする事ができるでしょう。しかし、先週もお話ししましたように罪とは自分の力で帳消しにできるようなものではないのです。実にこのことがこのローマ書のテーマなのですが、罪は我々の「良い行いをもって帳消し」とされるものではなく、罪というものは「赦される」ものなのであります。

その赦しの道を神様は今から2000年前に十字架におかかりになったイエスの死を通して、私達に明らかにしているのです。そうです、イエス・キリストが私達の罪の身代わりとなり、その罰を全て御身に受けてくださったゆえに、私達の罪は赦されるのです。ですから「こんなことを誰が信じようか」なのです。それは全く私達の思いを超えたものであり、十字架に磔にされたイエス様を今、皆さんの前に「これですよ」と見せることもできないのです。

このことをパウロはコリント人への第一の手紙でこう語っています「ユダヤ人はしるしを請い、ギリシア人は知恵を求める」（コリント人への第一の手紙1章22節）。ユダヤ人達は自分の祖先に神がなされたような目に見えるしるし、すなわち奇跡を求めていました。すなわち、あのモーセの10の奇跡のような、出エジプト記に記されている紅海の水が真っ二つに分かれてしまったような奇跡です。そして、ギリシア人は知恵を求めました。多くの哲学者を輩出した彼らはアテネの街角で常に新しい教えについて活発に議論がなされていました。そう、その議論とは彼らの頭脳が司る知恵を取り扱うものでありました。

そして、このことは現代も変わらず、私達は心の中で「しるし」、すなわち目に見え、手に取ることができ、驚嘆するような刺激を求め、また「知的な情報」を集めようとしています。そして、これらのことはパウロの時代に比べましたら驚異的な進歩を遂げています。説明するまでもありません、テレビやインターネットは世界中で見られる驚くべきことを私達の前に示し、知的な情報と思われるようなことはいつでも、どこでも手に入れることができるようになりました。

「希望」とは「未踏の地に向かっている時」に私達が心に抱くものです。なぜなら、そこにいけば何かがある、そこには希望があるだろうと思うか

らです。そのような意味で100年前、私達には希望がありました。一生懸命に働いてこの貧しさから抜け出て生活が豊かになれば、私達は幸福になれると思えたからです。自分は受けられなかったけれど、自分の子供達が良い教育を受ければ、彼らの生活は豊かになる、幸せになれる。そんな「希望」がいくつもあったのです。

しかし、その時から100年が経ち、100年前にあの山の向こうに希望があると思っていた私達はその山を越え、さらにその先にある山々を超えて、今、ここにいるのです。100年前にあれがあれば、これがあればと思っていた当時の人間が望んでいたものを私達は全て手に入れているのです。

さあ、それでは彼らの希望の地に到達している私達は本当に幸いになったのか。問題はなくなったのか。いいえ、彼らが抱いた希望の時代においても、私達は多くの問題に囲まれているのです。これまで「希望という扉」を一つ一つ開けて、ここまできましたが、そんな扉も今日、全て開け尽くしたように思われるのですが、いかがでしょうか。

これから確実にやってくる時代というのはコンピューターが人間の代わりに今まで以上に色々なことをしてくれるという時代ですが、多くの私達はそこに希望など持てずに、かえって不安が増し加わっています。すなわちパウロが書いた「しるし」や「知恵」は私達の根本的な問題には何も役に立たないということなのです。

それでは私達の根本的な問題は何なのでしょう。それこそが聖書が人類の初めから取り上げている問題であり、それは私達の罪の問題です。この問題は新機種ofセルホンや今、注目されている人の頭脳をもったAIによってはどうすることもできないのです。私達の最新のセルホンは私達の欲望を掻き立て、AIが私達の仕事を奪えば、心の中には苦々しい思いがわき、その思いにより、私達は何かをしでかしてしまうか分からないのです。

ですから皆さん、今こそ聖書が言っていることに立ち返る時です。私達は「あれもこれも得た、そして賢くなった」ということだけで生きる者ではないからです。「誰がこのことを信じ得ようか」。その信じ得ないことの中に私達の本当の希望があるのです。

二つ目のことをお話ししましょう。それは「ユダヤ人の救い」ということです。

今日、読みましたローマ書の後半にはこんな興味深いことが書かれています。19 なお、わたしは言う、イスラエルは知らなかったのであろうか。まずモーセは言っている、「わたしはあなたがたに、国民でない者に対してねたみを起させ、無知な国民に対して、怒りをいだかせるであろう」（申命記32章21節）。20 イザヤも大胆に言っている、「わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した」（イザヤ65章1節）。21 そして、イスラエルについては、「わたしは服従せず反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた」と言っている（ローマ10章19節－21節）

モーセとはこのローマ書が書かれた約1500年前を生きた人であり、イザヤはこのローマ書が書かれた750年前に生きた人です。言うまでもなく彼らの間に互いの面識はありません。しかし、彼らが共通して言っていることは、神はイスラエル人ではない者、すなわち神を求めない異邦人により（異邦人とはユダヤ人以外の全ての者、すなわち我々、日本人であり、アメリカ人のことです）見出され、それゆえに神は彼らに現れた。このことによりユダヤ人はねたみと怒りをもつであろう。しかし、そんなイスラエルに対して神は終日、いつも手を差し伸べていたと言われるのです。

私達の手元にあります聖書には二つの区分がありまして、その前半を旧約聖書と呼びます。そして、その後半を新約聖書と呼びます。この旧約聖書と新約聖書を区別するものは何かというと、とてもシンプルに言いますとイエス・キリストが誕生する前が旧約聖書であり、イエス・キリストの誕生以降が新約聖書となります。

そして、その旧約聖書の時代は「神」と「イスラエル」の間に契約が取り交わされた時代であり、イスラエル人以外の人たち、すなわち異邦人はその契約の中にはおりませんでした。その時代のただ中にありましたモーセとイザヤは、そのような時代にありながらも、神は我々以外の者達、すなわち異邦人によって私達イスラエルにねたみを起こすであろう、その異邦人にご自身をあらわすであろうという預言を残していたのです。

神に選ばれたイスラエルは頑なで、神に従いえず、それに対してイスラエル以外の者達、すなわち異邦人が神に対して目が開かれ、イエス・キリストを信じている。これまでなかった、そのような現象が起き始めていた時代というのが、このパウロがローマ書を書いていた時であったのです。そう、救いはイスラエルに限定されるのではなく、それが全ての人間へと向

けられていったのです。そして、それは古の昔からの神の御計画であったとパウロはここで言っているのです。

すなわちイエス・キリスト以来、ユダヤ人ではなく、全世界のあらゆる人間にクリスチャニティーが伝えられ、今や全世界において22億5000万人、世界人口の33.4%がクリスチャンであるということを私達は否定できないのです。まさしく、世界は神の御計画どおりに進み、その計画の成就の中の一人の異邦人が私であり、皆さんなのです。

ユダヤ人は昔から今にいたるまで、この地にメシアが来ることを祈り求めています。それは私達、キリスト教徒が信じているイエス・キリストではありません。ユダヤ人は旧約聖書に対して、我々よりもはるかに多くの知識をもっています（言うまでもありませんが、彼らはイエス・キリストを救い主と信じていませんので新約聖書は彼らの聖典ではありません）。彼らはなんといっても聖書の原語であるヘブル語で聖書を読めるのですから、私達以上、そこに書かれている真意を読み取れそうに思えます。当然、先ほどのイザヤ53章をも当然、彼らは知っていますし、異邦人である私達が指摘している旧約聖書の中に記されているキリストに関する預言も知っているはず。しかし、彼らはそれでもイエスを受け入れません。

よく友人と話すのですが、このように彼らの心がイエス・キリストに対してここまで固く閉ざされているということ自体、私達には不思議なことであり得ないと思います。なぜ、このようなありえないことが起きているのでしょうか。パウロはこのように記しています。

11 そこで、わたしは問う、「彼らがつまづいたのは、倒れるためであったのか」。断じてそうではない。かえって、彼らの罪過によって、救が異邦人に及び、それによってイスラエルを奮起させるためである。（ローマ11章11節）

ユダヤ人の心がイエス・キリストに対して閉ざされたのは、そのことによって救いが異邦人におよぶためであったのです。それによって彼らが奮起するためでありました。そして、このことは奥義なのだと説明をしながら筆を進めます。

25 兄弟たちよ。あなたがたが知者だと自負することのないために、この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時までのことであって、26 こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のよう

2018年2月11日 「私達、そしてユダヤ人の救い」

に書いてある、「救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払うであろう（ローマ11章25節－26節）

一部のイスラエル人が頑なになったのは、異邦人が全部救われるにいたる時までのことであり、ということは既に福音が地球の隅々にまで伝えられ、多くの異邦人が主イエス・キリストにあって救われている現在、まさしくイスラエルの救いの到来はいつ起きてもおかしくないことなのです。

そして、パウロはここでイザヤ59章20節、21節を引用して「救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払う」と記しているのです。シオンとはイスラエルのことであり、ヤコブとはイスラエル人のことから、これは既に2000年前にイスラエルにこられたイエス・キリストのことをあらわしているという学者もいれば、イエス・キリストが再びこの地にくる再臨をあらわしているという学者もいますが、どちらからも言えることはイエス・キリストがイスラエルの不信心を取り除き、彼らもイエスを主と受け入れる日が必ずくるとのことなのです。

かつてパウロはガチガチの律法学者でありました。そうです、頑ななユダヤ人の先頭を立てていた男だったのです。しかし、劇的な回心により彼はイエス・キリストを己が救い主として信じ、それを命をかけて伝える者となりました。当初、パウロは自分の古き熱狂的な信仰に対して、イエス・キリストがどのように関わっているのかということを探り、考え、神にその意味を問うたのでありましょう。そのことは後に、彼がユダヤ人としてイエスを信じていくために、また自らの先祖達の歴史の意味を知るために不可欠なことでありました。そして、これらのことについて、これまでお話ししてきたことを神様はパウロに示されたのでありましょう。

主にある皆さん、今日、お話ししましたようにユダヤ人の心は今も閉ざされており、現在も99パーセントのユダヤ人はイエス・キリストを信じておりません。しかし、その中には少数ながらイエスを信じるユダヤ人達が起きてきており、私達は彼らをメシアニック・ジューと呼んでいます。

しかし、やがてこのような少数のユダヤ人だけではなく、ユダヤ人全体が自らの罪を悔い改め、イエス・キリストを主、己がメシアとして信じる日が来るのです。そうです、今、世界を見まわす時にまさしく異邦人への伝道はほぼ行きわたっています。

聖書が記していますように、まさしくイエス・キリストの後の2000年の世界史はまさしくイエスを全世界の異邦人に伝える宣教の歴史でもあったからです。この世界は神様のご支配の中にあり、それゆえに神は私達のような異邦人にも救いの手を差し伸べ、さらにはユダヤ人を見捨てることもなく、古の昔に彼らと交わされた契約を破棄せず、彼らの救いをも神様は望まれているのです。

「悔い改める」という言葉には「方向を転換する」という意味があります。先にお話ししました、私達が突き進んでいる前方に希望がないのなら、私達がすべきことは向きを変えて方向を転換することです。そうです、そのディレクションをあらため、私達は神の前に自らの罪を悔い改めて、イエスを信じ、新しい人となり、神と共に生きるべきです。そして、このことにおいて異邦人もユダヤ人も区別はありません。我々は皆、神の前に罪人であるからです。しかし、我々もユダヤ人もイエス・キリストを信じる信仰によって救われるのです。それが聖書が全ての人間に語りかけているメッセージなのです。このメッセージを伝えることに命をかけたパウロの言葉をもって今日のメッセージを終えましょう。

14 わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある。15 そこで、わたしとしての切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなのである。16 わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。17 神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである（ローマ1章14節－17節）。

偉大なる神様は不思議なご計画をもってまず我々、異邦人を救い、これからユダヤ人をも救おうとしておられるのです。主が差し出されている救いの手を信仰をもって握る者はさいわいです。お祈りしましょう。